

九州学園福岡女短大 塩塚 瑞枝

1. アンシャン・レジームの荘麗、豪華、華麗な衣装から18C末の古典的衣装への変化は、たとえ、フランス革命という大きな歴史的変動があったとしても、極端な衣装様式の交替といわねばならない。この古典的衣装美への変容は革命という歴史的イベントの結果に一端の理由が挙げられるとしても、所詮は美的変容に目を向け、その要素が当然18C後半の精神的文化的傾向の中に根差していることを指摘しなければならない。本研究はそのことの解明によって、18C末古典的衣装美の服飾史的意義を明らかにしようとする。

2. 本研究の具体的資料は当時の美術、および各種の服装史書の挿絵を、一般的資料は歴史書美学書等による。

3. 古典的衣装美への傾倒は自然的な身体的美と自由に対する憧れの中に見出される。フランス浪漫主義文学に先鞭をつけたルソーは当時の人工的、反自然的美の傾向に反抗し、自然の美を讃え、生きた人間における感情、

感性の奔流を浮彫にし、また一方、英国における自然美愛好の傾向、さらに、ポンペイの本格的発掘による古代ローマ文化の発見、美術史におけるヴィンケルマンの発言、古典的美術の抬頭等、当時、かすかすの自然美への憧れに通ずる路が開かれていた。衣装もこれ等の自然美への通路によって、フランス革命の起こる以前に古典的衣装美への傾向を醸成し発展させていたことを明確に知ることができるのである。